

3 Rでイニシアティブをとれるか日本



静岡県立大学大学院

教授 **横田 勇**

Isamu Yokota

昨年の6月アメリカにおいて開催された主要国首脳会議（G8シーアイランド・サミット）において、小泉首相は、「日本での3 Rイニシアティブ閣僚会合」を提唱し、各国首脳の合意を得て、2005年4月28日から30日の3日間東京で各国の環境大臣が参加して開催されることとなりました。

世界的な人口の増加と経済規模の拡大に伴い、資源の消費、廃棄物の発生は増大の一途を辿っております。経済のグローバル化によって、先進国のみならず、途上国においても都市化の進展による処分場の確保の困難やその不適正管理によって衛生状態が悪化し、処理困難廃棄物が排出されるようになりました。今日全世界において廃棄物問題解決のための最適解が渴望されております。3 Rイニシアティブ閣僚会合は、日本が循環型社会の構築に向けて推進しようとしている廃棄物の適正管理や3 Rイニシアティブの現状とこれまでの蓄積を諸外国ならびに国際機関に評価していただく絶好の機会であります。わが国の環境政策は、明治以来伝染病に対する予防措置としてのし尿および生ごみの衛生的処理を嚆矢として下水道や廃棄物の処理体制等が順次整備されて参りました。元より狭小な国土の中で大量生産、大量消費されたプラスチック廃棄物や廃家電製品等が疾風怒濤の如く自治体の清掃事業を襲い、焼却を中心とした処理体制の強化を余儀なくさせたことが結果的にごみ焼却炉や排ガス処理技術の飛躍的な発展をもたらしました。

どんな物質であれ、それがエネルギーに変換されない限り物質不滅の法則がありますので、廃棄物問題は所詮物質が占有する空間（スペース）の確保という課題につき当たります。しかし、これから先廃棄物の新しい処分場所を確保することはほとんど至るところ困難と言ってよいでしょう。残された選択は既存の埋立地の掘り起こしによって掘り出されたものの中から資源化できるものを選別して再資源化し、減量化によって生じたスペースを新たな廃棄物の保管場所として再利用することです。その保管も最善の方法によって行われなければなりません。消費者も行政も事業者も皆が情報を共有し、知恵を出し合う時であります。要らなくなったら捨てるという「一方向的埋め立て依存型廃棄物処分」の時代は今や終焉を迎え、「循環型廃棄物管理」の時代に移りつつあります。廃棄物の発生を抑制するリデュース、用途を拡大して再使用するリユース、循環資源として再生利用するリサイクルの3 Rの徹底は日本でこそ喫緊の課題であります。

一貫して高い品質と性能を有する施設を市町村等に提供してこられた神鋼環境ソリューションのこれまでの歩みは日本の環境問題解決へ向けての取り組みの歴史そのものでもあります。将来世代を見据えた持続可能な社会発展の基盤となる生活環境整備のためのベストソリューションを、これからも「神環境鋼ソリューション技報」が社会に広く発信し続けられることを希望して止みません。